

---

# ヒキョウモノのワタシ

エレクトーン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヒキヨウモノのワタシ

### 【Nコード】

N51610

### 【作者名】

エレクトーン

### 【あらすじ】

私はヒキヨウモノだ。私は彼の色んなものを奪った。でも、一緒に居たかった。

「おはよ、瞬しゅん」

「おはよう花音かのん」

私の名前は志田しだ花音かのん、白英はくえい高校に通う高校2年生だ。そして、私と挨拶を交わしたコイツは久野くの瞬しゅん。私の幼馴染。そして、私の好きな人。

「それじゃ行こっか」

「おう」

私は毎日、瞬と一緒に登下校している。別に付き合ってもない私達が一緒に登下校する理由、それは簡単に言うと、私がヒキョウモノだからだ。

毎日、瞬と一緒に登下校して、学校でもいてられるときは瞬の席にいて、誰も瞬に近づかないように見張っている。まるで彼女の様にふる舞い、誰も瞬に告白できないようにしてきた。瞬が私以外を好きになれないようにしてきた。その成果か、私は瞬が告白されたのを見たことが無い。でも瞬は、私の親友である白石しらいし涼子りょうこという時の方が私という時よりも楽しそつだ。涼子には彼氏がいるから安心だとは思うけど……

ヒキョウモノの私は……私が瞬という事と引き換えに、瞬から他の女の子と離すチャンスや、色んなものを瞬から奪った。それでも、一緒に居たかった。

「おはよう花音」

「おはよ、涼子」

教室に到着、そして速攻で瞬は自分の席で眠りに付き、私は涼子に話しかけられる。瞬が中々のイケメンなのにあまり告白されないのは私の妨害の他に、この眠たがりの性格も一員していると思う。

「今日も一緒に登校だなんてアツいね〜」

「涼子達も同じようなもんでしょ？」

「そんなことないよ〜。あんた達みたいに毎日一緒じゃないし（私  
はあんたみたいにベタ惚れしてないしね〜）」

そう言われると私は何も言えなくなる。小学校のころからの初恋で、最後の恋の予定だ。この高校に入ったのも瞬が入るからと言う理由だし、瞬以外の男子には興味が無い。

「（まったく、初恋を高校まで続けるなんて純愛にもほどがあるわ  
よ〜）」

「も〜。からかわないでよ」

涼子にはいつもこうしてからかわれているけど、それは別に苦じゃない。瞬の事が好きなんでしょ？と聞かれるのは、小学生時代から数えてもう3桁に届いていると思う。だから、ちゃんと私が瞬のこ

とが好きって知っている涼子は私にとって気楽な存在だ。

「で、ほんとにいつになったら告白するのよ？まさかと思うけどさ、ずっとこのままなんて言わないよね？ノロケ聞かされる私の身にもなってるよ」

「……………」

「あゝ花音カワイイ！（久野君にもそんな姿を見せつけたらイチコロなのに）」

キンコーンカーンコーン

チャイムが鳴り、涼子が慌てて自分の席に戻った。いつの間にか瞬も起きていた。

そして放課後

「瞬、起きなよ」

「ふああゝ。何？放課後？」

肩を揺ると、瞬はすぐに起きた。いつもはかなり揺すらないと起きないのにすぐ起きたのは、ちゃんと眠れてなかったからだろう。何か考え事でもしながら寝たのだろうか？

「そう、帰る」

「ああ、先に帰ってて。寄る所あるから」

「え？」

意味が分からなくて、理解するのに数秒かかった。瞬が私と帰るのを断ったことはない……はずだ。少なくとも高校に入ってから一度も断られたことはない。それが、何で？  
瞬に嫌われたくない私は、瞬に何も聞かずに帰った。

「……………瞬」

私は悩んでいる。瞬が私と帰るのを断った日から3日が経った。その日から瞬は私と帰らなくなった。その間、私がじまものがいなくなったことにより、女の子達は瞬に告白をしまくっている。  
それに瞬は何となく私を避けていた。告白してきた女の子も全部断ってるらしいし、もしかして……彼女が出来たのだろうか？

それなら、私が今までしてきたことは何だったんだろう……

「あゝあ、寂し」

瞬に、一緒にお昼を食べるのを断られた私は1人で屋上にきていた。涼子も彼氏と食べるそうだから、他に一緒に食べられるような人がいない私は自然と1人で食べる事になったのだ。今はお弁当を食べ終えて、何となく屋上の風に吹かれている。

「…うわ、たっか」

フェンスまで歩いて下を覗いてみると、人が米粒くらいに小さく見えた。こんな高いところから飛び降りたらきつと助からないだろうな、と素直な感想を呟くと

「待て！早まるな！絶対にやめる！！」

瞬がバンと扉を開けて叫んだ。

「つてそこから聞こえるとかどんなけ耳良いのよ！」

完全に不意を突かれた私に、何でそんな所にいたのかという疑問はわからなかった。

「つてそうじゃな」

「落ちつけよ！そつだ！落ち着け」

いや、アンタが落ち着いて人の話聞いて！

「お、お前が飛び降りるなら俺も飛び降りるぞ！！」

つて言うかこんなに慌ててるコイツを見るのは初めてかも……

私は、最近のイライラもあって、ちょっとからかってやるんですよ。た。

「ねえ！何で最近私を避けてたの！！？」

「え……………それは……………」

瞬は顔を真っ赤にして言葉を詰まらせる。

もしかして……………ほんとに彼女ができたんじゃない……………

「彼女……………できたの？」

「……………違う」

「じゃあ何で私の事避けてたの！！？」

「それは…それは」

瞬は、ああもう、どうにでもなれ！と呟いて、叫んだ。

「もう我慢できなかつたんだよ！！！」

「それって、私と一緒に居るのが嫌だったの？」

「そうだけど……………違う」

「……………いじり事よ」

瞬は私から目をそらして、1人語のように言った

「俺な、お前が傍に居て、お前が俺の世話焼いてくれるの、当たり前に感じてたんだ。でもさ、この先もずっとお前と一緒にいるわけじゃないし……辛かったんだよ。だって俺は」

そこで瞬は言葉を切り、私をじっと見つめて言った。

「花音が好きだから！……だから……避けてた」

その瞬の顔があんまり必死で、でも言ってることが嬉しくて、馬鹿しくて

「私も、大好き！」

つい口が滑ったフリ、をしてしまった。そんな自分に、ヒキョウだな〜と思いつつ、真っ赤な顔で状況が飲み込めないアイツに抱きついてやった。

私はヒキョウモノだけど、これだけは誇って言える。私は、コイツの事が大好きだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5161o/>

---

ヒキョウモノのワタシ

2010年10月26日02時23分発行